首里城大龍柱

技術検討委への指摘

〈上〉

永津 禎三

「絵図の読み」に誤り

論点ずらし反証したふり

国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」は1月30日に開いた報告会の中で、首里城正殿の大龍柱を暫定的な結論として相対向きで復元を進める理由などを含めて説明した。技術検討委の説明に対して誤りや矛盾を指摘する琉球大学名誉教授の永津禎三氏が原稿を寄せた。

首里城復元に向けた技術検討委員会報告会が1月30日に開催されたが、形ばかりのものであった。新型コロナウイルス感染症オミクロン株のまん延中とは言え、質問用紙での質問を主催者が都合よく選択して答えるのみでは、報告の誤りさえ指摘できなかった。

事前に、「首里城正殿大龍柱を考える会」「首里城再興研究会」「絵図から考える首里城の会」の三団体は1月7日付で公開質問状を提出し20日までに文書回答を要求していた。

ところが、沖縄総合事務局は電話一本で、「文書回答はできない。質問内容の一部は報告に含まれる」と伝えてきた。公僕の仕事としてあり得ない対応である。

ながつ・ていぞう　1953年生まれ。琉球大学名誉教授。愛知県立芸術大学大学院修了。浦添市美術館などで個展開催。論文に「雪舟筆秋冬山水図を読む」「橋の系譜」など。ホームページで大龍柱に関する論考も全て閲覧可能。アドレスはhttps://www.teizomasakin.com/

検討委への質問

報告会当日、私が質問用紙に書いた質問は以下の4点である。

①「寸法記」が正しいという考え方では、描かれた大龍柱の前脚が下向きに描かれていることを矛盾なく説明できない。近代以前の絵図は「認識しやすいように描く」という考え方なら、「古代エジプト壁画では人の両方の足を親指側から描いている」のと同様で矛盾が無い。従って「寸法記」は認識しやすい横向きで大龍柱を描いたと考えるのが妥当だが、技術検討委員会はこれに反証できるのか。

②技術検討委員会は、琉球新報の12月4日社説に反論できるか。反論無くしては「暫定的な結論」を破棄するしかないと考えるのが常識であるが、どうか？

③公開質問状に文書回答しなかったのは国の機関として間違っていないか？今後でも文書回答するべきでないのか？　また、この公開質問状の内容についてのシンポジウムをするべきではないのか？

④高良倉吉資料「総括的な視点から」Ⅰ（2）に、〈「寸法記」は写しではなく、原本である〉とあるが、その根拠は何か？

根拠ない記述

当然、重要な質問から書いている。ところが、読み上げられたのは④だけだった。当日配布された高良倉吉氏の資料に記載されていた内容である。これへの高良氏の回答は自らの記載内容を否定するものだった。

「正確には紙料の年代測定が必要だろう。王府は文書が傷むと書き直していたので、それではないかと思う。鎌倉芳太郎が写したとは考えられない、筆跡が異なるからだ」。要約すれば以上が回答である。

つまり、原本でなく、いつのものか定かでなく、王府の文書かどうかも推定なのである。鎌倉の筆跡と異なるかどうかの正確な筆跡鑑定も紙料の年代測定も既になされているべきだが、いまだ行っていないようだ。

また、2020年に沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館で開催された企画展「琉球の芸術・文化に魅せられて　鎌倉芳太郎と首里城」で寸法記の制作年代が「筆写：1920年代」となっていたこととの整合性はどうなるのか。やはり、技術検討委員会だけでは解明できない訳で、結論を出す前に公開討論会などを行う必要があった。だから今からでも③の質問のように公開討論会やシンポジウムを行う必要があるのだ。

無意味な事例数

①と②は、「絵図の読み」についての質問である。安里進氏は「寸法記の信ぴょう性は高い」「寸法記は間違っていない」と繰り返し発言するが全く論点がずれている。私は寸法記が間違っているとも信ぴょう性に欠けるとも言っていない。技術検討委員会が寸法記の「絵図の読み」を誤っているのではないかと問うているのである。

技術検討委員会は、これまで慎重に「絵図の読み」に議論が向かうのを回避し続けているが、安里氏の「報告資料　Ⅳ―2」は、先日の報告会で私が質問した内容と少し重なるところがあるので、反証しておこう。

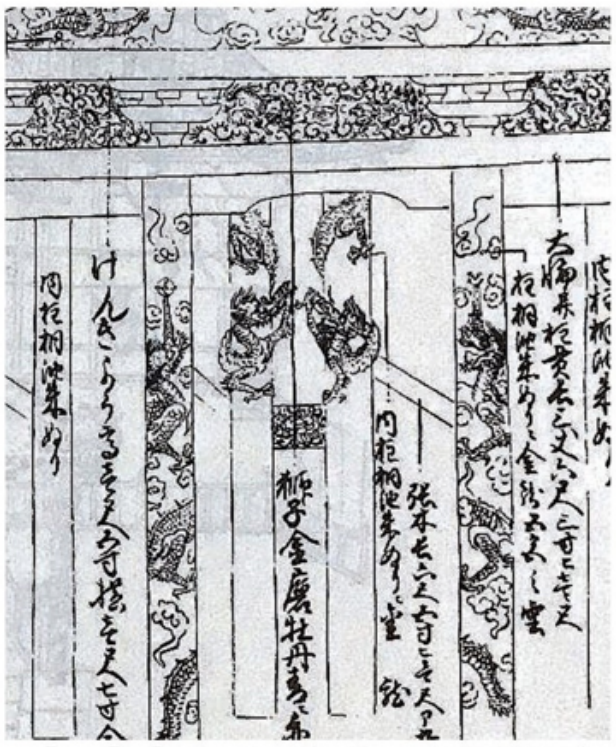
〈Ⅳ―2『寸法記』大龍柱図の珠取前脚―逆描画の検証〉で安里氏は、『阿形が右前脚を前に、吽形が左前脚を前に出す図が「原則」』と多くの事例（寸法記と同時代琉球の龍図像199例と中国皇帝関係龍図像104例）を調べて結論したと報告している。その上で「『寸法記』龍柱図は、琉球の伝統的な珠取龍の構図にもとづいて描かれている。戦前龍柱との違いを根拠に、『寸法記』の大龍柱図の信頼性を否定することはできない」としている。

【図A】のように、向き合う双龍は左が吽形（うんぎょう）、右が阿形（あぎょう）にするのが原則になっているので、吽形の左前脚、阿形の右前脚が前に差し出される形になるのは当たり前である。逆であれば差し出した前脚で頭部など体の一部が隠されてしまい図像として認識しにくい。これがまさに絵図は認識しやすいように描かれるということなのである。

こんな当たり前のことは図像に当たれば当たるだけ事例数が増える。数で正当性を主張したつもりだろうが、そもそも絵図の信頼性を問題にしていないのだから意味はない。「絵図の読み」について反証できないので、紛らわしい例をあげて反証したふりをしているだけだ。

「寸法記」絵図の龍柱には見えている片前脚しか描かれていない。もう一方に宝珠を持っているはずと分かるのは実際の大龍柱彫刻と対照して初めて分かることで、絵図としては宝珠を持って両前脚が描かれている図像とは識別できないものである。論の立て方もデータの取り方も間違っている上に論点がずれているのである。

「寸法記」絵図の龍柱に描かれている前脚は、左脚でも右脚でもなく「脚」なのである。近代以前の例として古代エジプト壁画を上げているのは、そこに描かれた人物像の両足が共に親指側から描かれていて、これも二本の「足」を示しているにすぎないことと合致するからである。



【図A】「寸法記」で首里城正殿の龍紋様などを記した部分。中央付近で向かい合う双龍のうち、左側の吽形（うんぎょう）は左前脚を前に差し出し、右側の阿形（あぎょう）は右前脚を前に差し出す形。吽形を左、阿形を右に配する限り、認識しやすくするためこうした形になる（県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）

琉球新報　2022年3月15日